

行宮作歌攷

——天平十二年聖武行幸時の伊勢路の萬葉詠から——

廣岡義隆

○キーワードⅡ 行幸・離宮・内舎人・宴席歌・從駕歌

一、はじめに

天平十二年(七四〇)十一月の聖武天皇「関東行幸」(注1)(出
発は十月末の二十九日)時の一連の萬葉歌群(6・一〇二九〜一〇三六番歌)
には、行宮名が次のように見られる。

河口行宮・朝明行宮・狹殘行宮・多藝行宮・不破行宮

この行宮名の列挙に格段の不審はないが、調べてみると実は
特異なこととなっている。即ち、『萬葉集』中に「行宮名」が記載さ
れている事例は以下のわずか一〇例に限られる。

- ①伊豫熱田津石湯行宮 1・八左注
- ②阿胡行宮 1・四四左注
- ③和射見我原乃行宮 2・一九九(20・21句)
- ④河口行宮 6・一〇二九題詞

- ⑤河口行宮 6・一〇三〇左注
- ⑥朝明行宮 6・一〇三〇左注
- ⑦河口行宮 6・一〇三一左注
- ⑧狹殘行宮 6・一〇三二題詞
- ⑨多藝行宮 6・一〇三四題詞
- ⑩不破行宮 6・一〇三六題詞

①・②が巻第一の二例、③は巻第二の一例で倭歌中での唯一
の用例、他の④〜⑩の七例が当面の聖武関東行幸歌群中の事例
であり、その用例の偏りが指摘出来る。

この「行宮」に類する事例を『萬葉集』中から挙げると以下
のようになる。宮都の例や殯宮の例等は除いた。また京城内の
例(佐紀宮)「高市皇子宮」「大津皇子宮」「嶋宮」などを除き、離宮
とある例(吉野離宮)「三香原離宮」「河内離宮」「高圓離宮」も除き、
関連して「吉野宮」「難波宮」も除いた。「行宮」に類する事例
を挙げるといふ観点からの除外である。こうした措置をとると、

以下の事例が残る。

- a 伊豫温湯宮 1・六左注
 - b 兔道乃宮子 1・七
 - c 比良宮 1・七左注
 - d 伊豫湯宮 1・八左注
 - e 八十一隣之宮 13・三二四二
- eは、卷第十三における倭歌中の例ということで特異な用例になるが、それ以外は卷第一の用例となり、卷第一における偏在という意味において「行宮」の事例と重なる。

二、「行幸関係語の確認」

次に『萬葉集』中における「行幸」に關係する語（以下「行幸関係語」と称する）の用例について、確認しておく。

「行幸」の例は『萬葉集』中、六例ある（1・五、3・三五、3・三三、4・五四、6・九九左注、6・一〇三）。この内、歌中の語については一般に「いでまし」或いは「みゆき」と訓んでいる。「行」の例も『萬葉集』中に五例ある（3・二八八左注、3・二九五、18・四〇九題詞、20・四三三題詞、20・四四五題詞）。歌中例の二九五番歌は一般に「いでまし」と訓んでいる。また、「みゆき」と訓む「御幸」（4・五三）と「三行」（9・二四九）の例が存している。他に、一般に「いでまし」と訓んでいる「御駕」（2・三〇）の一例（志貴親王葬送挽歌中の事例）がある。以上の他は、「幸」一字の例が

圧倒的に多くて全五八例存する（注2）。

これらの「行幸関係語」（幸・行幸・幸行・御幸・三行・御駕）全七二例の巻別の用例数を一覧すると次のようになる。

卷1	……三二例（幸・行幸）
卷2	……五例（幸・御駕）
卷3	……七例（幸・行幸・幸行）
卷4	……五例（幸・行幸・御幸）
卷6	……一二例（幸・行幸）
卷9	……四例（幸・三行）
卷18	……一例（幸行）
卷19	……二例（幸）
卷20	……四例（幸・幸行）

やはり卷第一における例が三二例と突出しているが、ついで当面の卷第六における例が一二例であり二番目に位置している。卷第六は卷第一について「行幸関係語」が多出し、公的行事の歌が多く採録されている歌巻であることが出来る。卷第六の当面の聖武関東行幸歌群（6・一〇三～一〇六番歌）中の「行幸関係語」は、一〇二九題詞（幸）と一〇三二番歌（行幸）となり、「行宮」のような偏在があるわけではない。

三、「行宮」関係歌について

先に見た「行宮」に類する事例（a 伊豫温湯宮、b 兔道乃宮子、

c 比良宮、d 伊豫湯宮、e 八十一隣之宮」を含めて、「行宮」關係歌を卷次・歌番号順に掲げる。用例の上部に a とか ① と記しているのは、先に挙げた「行宮」の用例番号 (①) (⑩) 及び「行宮」類似例の符号 (a) (e) である。

幸讃岐國安益郡之時、軍王、見山作歌。

霞立 長春日乃 晩家流 和豆肝之良受 村肝乃 心乎痛
見 奴要子鳥 卜歎居者 珠手次 懸乃宜久 遠神 吾大
王乃 行幸能 山越風乃 獨座 吾衣手尔 朝夕尔 還比
奴礼婆 大夫登 念有我母 草枕 客尔之有者 思遣 鶴
寸乎白土 網能浦之 海處女等之 焼塩乃 念曾所焼 吾
下情 (1・五)

反歌

山越乃 風平時自見 寐夜不落 家在妹乎 懸而小竹櫃

(1・六)

右檢日本書紀、無幸於讃岐國。亦軍王未詳也。但山上憶良大夫類聚歌林曰「記曰「天皇十一年己亥冬十二月己巳朔壬午、幸于伊豫湯宮」云々。一書「是時宮前在二樹木。此之二樹、斑鳩比米二鳥大集。時勅多挂稻穗而養之。乃作歌」云々」。若疑從此、便幸之歟。

明日香川原宮御宇天皇代 (天豐財重日足姬天皇)
額田王歌。

b 金野乃 美草荊葦 屋杼礼里之 兔道乃宮子能 借五百磯所念 (1・七)

c 右檢山上憶良大夫類聚歌林曰「一書「戊申年、幸比良宮大御歌」。但、紀曰「五年春正月己卯朔辛巳、天皇至自紀溫湯。三月戊寅朔、天皇幸吉野宮而肆宴焉。庚辰日、天皇幸近江之平浦」。

後岡本宮御宇天皇代 (天豐財重日足姬天皇讓位後即位後岡本宮) 額田王歌。

熱田津尔 船乘世武登 月待者 潮毛可奈比沼 今者許藝乞菜 (1・八)

d 右檢山上憶良大夫類聚歌林曰「飛鳥岡本宮御宇天皇元年己丑九年丁酉十二月己巳朔壬午、天皇太后幸于伊豫湯宮。後岡本宮馭宇天皇七年辛酉春正月丁酉朔壬寅、御船西征始就于海路。庚戌御船泊于伊豫熱田津石湯行宮。天皇御覽昔日猶存之物當時忽起感愛之情。所以因製歌詠為之哀傷也」。即此歌者天皇御製焉。但額田王歌者別有四首。

①

石上大臣、從駕作歌。

吾妹子乎 去來見乃山乎 高三香裳 日本能所見 國遠見可聞 (1・四四)

右日本紀曰「朱鳥六年壬辰春三月丙寅朔戊辰、以淨廣肆廣瀨王等為留守官。於是中納言三輪朝臣高市麻呂脫其冠

② 位繫上於朝重諫曰「農作之前車駕未可以動」。辛未、天皇不從諫遂幸伊勢。五月乙丑朔庚午御阿胡行宮」。

高市皇子尊城上殯宮之時、柿本朝臣人麻呂、作歌一首。并短歌
挂文 忌之伎鴨（一云由遊志計礼杼母）言久母 綾尔畏伎
明日香乃 真神之原尔 久堅能 天都御門乎 懼母 定賜
而 神佐扶跡 磐隱座 八隅知之 吾大王乃 所聞見為
背友乃國之 真木立 不破山越而 狗劍 和射見我原乃
行宮尔 安母理座而 天下 治賜（一云掃賜而） 食國乎

定賜等 鷄之鳴 吾妻乃國之 御軍士乎 喚賜而 千磐破
人乎和為跡 不奉仕 國乎治跡（一云掃部等） 皇子隨 任
賜者 大御身尔 大刀取帶之 大御手尔 弓取持之 御軍
士乎 安騰毛比賜 …下略： （2・197）

③ 十二年庚辰冬十月、依大宰少貳藤原朝臣廣嗣謀反發軍、幸于伊勢國之時、
河口行宮、內舍人大伴宿祢家持、作歌一首。

河口之 野邊尔廬而 夜乃歷者 妹之手本師 所念鴨
（6・1012）

天皇御製歌一首。
妹尔戀 吾乃松原 見渡者 潮干乃瀧尔 多頭鳴渡

⑤ 右一首今案、吾松原在三重郡。相去河口行宮遠矣。若疑
（6・1010）

⑥ 御在朝明行宮之時、所製御歌、傳者誤之歟。

丹比屋主真人歌一首。
後尔之 人乎思久 四泥能崎 木綿取之泥而 好住跡其念
（6・1011）

⑦ 右案、此歌者不有此行之作乎。所以然言、勅大夫從河口
行宮還京、勿令從駕焉。何有詠思泥崎作歌哉。

⑧ 狹殘行宮、大伴宿祢家持、作歌二首。
天皇之 行幸之隨 吾妹子之 手枕不卷 月曾歷去家留
（6・1013）

御食國 志麻乃海部有之 真熊野之 小舩尔乘而 奥部榜
所見
美濃國多藝行宮、大伴宿祢東人、作歌一首。
（6・1014）

⑨ 從古 人之言來流 老人之 變若云水曾 名尔負瀧之瀨
（6・1015）

大伴宿祢家持、作歌一首。
田跡河之 瀧乎清美香 從古 官仕兼 多藝乃野之上尔
（6・1016）

⑩ 不破行宮、大伴宿祢家持、作歌一首。
關無者 還尔谷藻 打行而 妹之手枕 卷手宿益乎
（6・1017）

e 百岐年 三野之國之 高北之 八十一隣之宮尔 日向尔
行摩關矣 有登聞而 吾通道之 奥十山 三野之山 靡得

人雖跡 如此依等 人雖衝 無意山之 奥礪山 三野之山
右一首。 (13・三四)

まず、aの「伊豫温湯宮」(1・六左注)とdの「伊豫湯宮」(1・八左注)及び①の「伊豫熱田津石湯行宮」(1・八左注)について見てみよう。aは「山上憶良大夫類聚歌林曰」とあり、憶良編になる『類聚歌林』からの引用である。その『類聚歌林』が「記曰」として『日本書紀』舒明天皇十一年十二月壬午条を引用している。該当の『紀』には「伊豫温湯宮」とそのままの語形で見られる。dは、やはり『類聚歌林』に載る箇所で、「飛鳥岡本宮御宇天皇元年己丑九年」とあるが、この「九年」は諸注が指摘するように十一年のことと考えられ、『舒明紀』十一年十二月壬午条は右に引いた通りで「伊豫温湯宮」とあり、それをここは簡略に「伊豫湯宮」と記しており、aとdは同所をさしたものであることは明らかである。①は、同様に『類聚歌林』に載る箇所であり、ここは『日本書紀』斉明天皇七年辛酉春正月条を引用している箇所、御船泊于伊豫熱田津石湯行宮」と載るそのままを引用している箇所である。続く「天皇御覽昔日猶存之物當時忽起感愛之情」は『日本書紀』にはない文章であるが、この『類聚歌林』に載る一文の「昔日猶存之物」から、少なくとも『類聚歌林』の編者憶良は同所と理解していた事になり、また憶良が拠ったと考えられる逸書(『昔日猶存之物』所載の書)においても同様の理解であったと見てよく、a・d・①は同一

の場所をさしていると見て良い。

右のように見ると、「行宮」と書かれていなくても、行宮としての例が存することになり、このa・eの事例の検討が意味を持つて来る。となると、cの「比良宮」(1・七左注)も「比良行宮」の可能性を有することになるが、「幸比良宮」とあるところからすると、通過点というよりは目的地としてあることになり、次に示す事例eの離宮に限りなく近い事例と見るのが良い。

bの「兎道乃宮子」(1・七)については、古都(少なくとも説話上における古都)の可能性があること、かつて説いた通りである(注3)。

eの「八十一隣之宮」(13・三四)についても、実在か否かは別として、少なくとも説話的存在として、景行天皇の「泳宮(泳宮、此云區玖利能彌那)」(景行紀四年春二月条)が存在し、それに關係する長歌であろう。この場合、景行紀によると、

鯉魚浮池 朝夕臨視而戲遊 時弟媛欲見其鯉魚遊 而密來臨池(同条)

とあり、行宮というよりも常置の離宮として描かれている。『景行紀』の「泳宮」と『萬葉集』の「八十一隣之宮」(e)とはテキストが異なることから、同一視するには問題があるが、『萬葉集』に出る宮が行宮か離宮かという判断としては『景行紀』が載せる原伝承の影を見ても良からう。

以上のように見ると、a・e中、行宮としての例は「a・d・①」におけるa・dの事例ということになるが、「伊豫温湯宮」としての「石湯行宮」(①)は、その地が行幸目的地としてある

という意味においては、cの「比良宮」やeの「八十一隣之宮」に極めて近い。もちろんこの斉明天皇七年における「a・d・①」の事例は、行幸の最終目的地ではなく、立ち寄ったという事例であり、その意味においてはまさに「行宮」として存在しているのであるが、本来のコースからは大きく外れると共に、比較的長い滞在があったという意味からも、離宮的存在と位置付けることが出来よう。それは『伊豫國風土記』の逸文「伊社迹波之岡」条（湯郡条）に描かれているところからも納得できることとなる。即ちこの地は、事の真偽は別として五代五度の「行」があり、それはこの湯岡が目的地であったと考えられること、同じく事の真偽は別として「上宮聖徳皇」（注4）が「伊社迹波之岡」の湯岡の側に温湯を讀える碑文の温湯碑を建てたということ、舒明天皇によるこの地での養鳥説話の存在などから、この地は一時的な行宮ではなく、長期滞在型の離宮としての性格を有していたと考えてよい。となると「行宮」とあっても、行旅途中の一時寄泊所としての行宮から、目的地としての離宮的存在としての行宮まで、幅広い事例があることになる（注5）。

「行宮」は通常「かりみや」と訓読しているが、『伊豫熱田津石湯行宮』などは常設的離宮に近いものであったであろう（注6）。bの「兎道乃宮子」もそうした事例を髣髴とさせるものである。

②の「阿胡行宮」（1・四左注）は、常設かどうかは不明として、このケースも目的地としての「行宮」の例となる。

また③の「狛劍和射見我原乃行宮」（2・一九、19〜21句）の

例は柿本人麻呂による高市皇子殯宮挽歌の一節で、この地に壬申の乱時における大本営が設置されたことを意味する箇所である。可能性の問題ではあるが、そこには離宮に類した施設があり、乱時に大本営として転用されたというものではないかと考えると、単に一時的な行宮であったと見ない方がよいであろう。

④〜⑩は、当面問題とする天平十二年十一月の聖武天皇関東行幸時の一連の萬葉歌群（6・二〇九〜二〇三番歌）中のものであり、次の「四」で考えたい。

四、該当歌群について

さて、該当歌群八首（含題詞左注）中に、④〜⑩の七例の「行宮」例が見られる。これらはいずれも行旅途中の一時寄泊所としての行宮の例である。

「河口行宮」は、④（6・二〇元題詞）、⑤（6・二〇三左注）、⑦（6・二〇三左注）に出、大伴家持によつて「河口之野邊」（6・二〇元番歌）と描かれている地である。『続日本紀』には「老志郡河口頓宮」とあり、聖武天皇一行が十泊した地である。前稿（注7）では仁藤敦史氏（注8）や瀧浪貞子氏（注9）の成果を引用した。この地には「川口關」（注10）があり、『催馬楽』には「可波久知乃世支」（催馬楽・三六番歌）とある。往時の「関」は単なる柵垣（ゴーストツブ）であったとは考えられず、それは一つの役所として機能していたものであり（注11）、柵垣の外側（東側）

に役所(衙)が存したに違いない。そうした「野邊」に位置する役所の建物の一部が一時的な行宮として機能したものと考えてよい。十泊した「河口行宮」での或る夜の宴での詠歌が、

河口之野邊^{かはくみのべにいはりて}爾廬^{のよの}而^{いもがたもとし}夜乃^{よの}歷者^{いもがたもとし}妹乃^{いもがたもとし}手本師^{おもはゆるかも} 所念鴨^{おもはゆるかも}

(6・10三九)

ということになる。行旅中、「妹」への慕情を詠い挙げるのは當時の一つの規範としての「みやび」であつたということと言及したところであるが(注12)、この河口での「妹」を詠む詠法も宴席における「わざ」に他ならない。

⑧の「狹殘行宮」(6・10三三題詞)と、⑥の「朝明行宮」(6・10三〇左注)とは同一の所をさしたものと考えて良い。「朝明行宮」

⑥とある一〇三〇番歌は続く一〇三一番歌と共に別資料からの増補ということが題詞形式及びその左注内容(疑義の提起)

から影山尚之氏によつて指摘されている(注13)。同歌の左注はその増補後のものと見ることが出来る(注14)。即ち、一連の歌群は次の三段階を経ていると見るのがよい。

一……一〇二九番歌、一〇三〇番歌(六首)

二……「一」に一〇三〇番歌の題詞と歌の増補(計八首)
三……「二」に一〇三〇番歌の左注の加筆

⑧の「狹殘行宮」(6・10三三題詞)の事例は大伴家持が大きく関与していると考えられる当初歌群(二)に属している。また⑥の「朝明行宮」(6・10三〇左注)は、第三段階での加筆による別称と見てよい。「狹殘行宮」については、「狹殘」は歴史地名

「佐々良井」(磯井)の地に該当し、現在の四日市市下さざら町にその痕跡を残すとした岡田登氏の指摘(注15)により、前稿「狹殘行宮」における大伴家持詠についてで、「狹殘」の用字から「さざら」のかりみや」と訓むのがよいと考定した(注16)。それは朝明郡の地にあり、山中章氏(注17)が指摘するように、朝明行宮の別称が狹殘行宮であると見てよい。これは、「郡名+行宮」か「地名+行宮」という呼称法に基づく違いとなる。

⑨の「多藝行宮」(6・10三四題詞)も離宮的存在と考えられる。

この美濃国当耆郡の地は、元正天皇の美濃国行幸『続日本紀』養老元年(七二七)九月十一日条、同月二十日条以来よく知られた所であり、同年十一月十七日には靈龜三年を改めて養老元年と改元されると共に、翌年二月七日から三月三日まで美濃国の醴泉が目的で行幸されてもいる。現地滞在は二週間程度としても、この地に離宮的な施設が建てられたと見るのが良からう。

⑩の「不破行宮」(6・10三六題詞)は、柿本人麻呂が高市皇子殯宮挽歌の中で「和射見我原乃行宮」(2・一九、19×21句)として掲げた③の例と同一の所を指すものである。先に③の箇所、離宮に類した施設があり乱時に大本営として転用されたというものであらうと見たところである。それを郡名によつて「不破行宮」としたものに違はなく、「朝明行宮」における「狹殘行宮」と同じ呼称法であり、「郡名+行宮」か「地名+行宮」という同所異称になる。

『続日本紀』には、行幸出発(十一月二十九日)の十日前の十

一月十九日に「任造伊勢國行宮司」が命ぜられている。行宮司は、急遽諸手配をしたことと思われるが、右で見たように旧来のものを借りて修復改造したと見るのが良い。このことについては、仁藤敦史氏が「基本的には郡家・駅家・国府・豪族宅など既存の施設を仮宮として利用したことが想定される」(注18)と指摘している。即ち、河口行宮は河口関(その役所の関連施設)を、狭残行宮(朝明行宮)は朝明郡衙の一部を、多芸行宮は離宮を、不破行宮は離宮に類した施設を改修して用いたものである。『続日本紀』によると、次第司(前後の警護人)として「惣四百人」とある(十一月二十三日条)。この四百人の中に恐らく橘諸兄たちは含まれてはおらず、総勢はより膨らむことになる。

五、行宮宴歌について

さてこの一連の歌群には、先に指摘したように、丹念に行宮名が記されており、それは『萬葉集』中の行宮記載例から見ると特異な存在として浮かび上がって来る。なぜこのようなことが起こったのかというについて、考えてみよう。

まずは大伴家持が天皇警備の内舍人として行幸に従駕していたことが挙げられる。内舍人としての従駕は冒頭歌の題詞に「内舍人大伴宿祢家持作歌一首」(6・103元題)とある。内舍人は、

檢簡性識聰敏儀容可取 充内舍人 《軍防令》46)

内舍人九十人(掌 帶刀宿衛 供奉雜使 若駕行分衛前後)

と養老令に規定されている。従駕の次第を精細に記録したのは大伴家持の性癖と言つてよく、それは「歌日誌」と称される後の巻第十七以降の四巻で具に見ることが出来る。

この一連の歌群にルポルタージュ文学としての特質を見て取ることが出来るならば、この伊勢行幸歌群の記述はより精彩を放つことになるのであるが、当時の大伴家持にルポ記録性という認識はなく、あくまでも自己詠を中心とした行幸従駕歌の手控えに他ならないことが見て取れる。先に見たように、一〇三〇番歌(聖武天皇詠)と一〇三一番歌(丹比真人屋主詠)は増補であるから当初は大伴家持の手許に無かったものであり、当初歌群は家持の五首に大伴東人の一首のみの記録であつたということになる。そういう意味では後の歌日誌同様に自己詠を中心とした記録ということになり、天皇詠すらも記し留めてはいなかったということになる。

以上、見たところによれば、一連の歌は結果的に行幸従駕の記録歌となつたということに他ならず、ルポ記録性はもとよりのこと、積極的に歴史記録として残す意図が無いことも勿論のことであり、大伴家持個人の歌詠記録としての手控えに他ならなかったということになる。

ではなぜ、『萬葉集』の中において特異とも言える一々の行宮名の記録があるのであるうか。それは「歌詠記録としての手控え」という右のまとめ以上には出ないと考える。即ち、行く先々

の休憩宿泊地において宴席が設けられたからに他ならない。行宮宴席の場といつてよい。

そうした旅先の行宮宴席においては、迎える現地の人々の歓迎の歌と一行のそれに和える挨拶詠とがあつてしかるべきことになる。例えば、

(天平) 九年丁丑春正月橘少卿并諸大夫等集彈正尹門部王家

宴歌二首

豫

公来座武跡

知麻世婆

門尔屋戸尔毛

珠敷益平

右一首主人門部王

(後賜姓大原真人氏也)

(6・10三)

前日毛

昨日毛今日毛

雖見

明日左倍見卷

欲寸君香

聞

(6・10二四)

右一首橘宿祢文成(即少卿之子也)

というやりとりはそうしたものの一例であるが、これは都中においての応酬である。また、巻第十八の巻頭には、越中国守として赴任していた大伴家持と都から橘家の使者として下つて来た田邊福麻呂との間での一連の応酬が録されている(18・四〇三〜四〇五。関連歌、18・四〇五六〜四〇六五)。この中に、難波の地での橘諸兄と元正上皇との次のようなかつての古詠のやりとりが記録されている。

太上皇御在於難波宮之時歌七首(清足姬天皇也)(内、二首)

左大臣橘宿祢歌一首

保里江尔波

多麻之可麻之乎

大皇乎

可年豆之里勢婆

美敷祢許我牟登

(18・四〇五六、橘諸兄)

御製歌一首(和)

多萬之賀受

伎美我久伊豆伊布

保理江尔波

多麻之伎美

弓々

都藝豆可欲波牟

(或云 多麻古伎之伎弓)

(18・四〇五七、元正上皇)

右二首伴歌者御船浜江遊宴之日左大臣奏并御製

おそらく、これに近い歌のやりとりが天平十二年の聖武行幸の旅先の行宮での宴席においても見られたはずである。こうしたことが、一々の行宮ごとに歌があり、その行宮名が記録されている理由であろう。しかしながら、一連の歌には現地の人の歓迎の詠歌も残らなければ、それに応えた歌も無く、天皇詠も見られない(天皇歌は別資料由来ということ、言及したところ)。このことは、歌の場に関わるものであろう。即ちこの時、大伴家持は内舍人として従駕していた。天皇の側近と言えどそれに違ひはないが、高級官僚としての陪従ではなく、あくまでも舍人としての従駕に他ならず、天皇レベルのハイ・クラスとは画された末席に位置していた。つきつめれば、家持の歌の場は都に残した「妹」への慕情を歌い上げるに適した末席であり、それが家持における行宮宴歌の場であつたということになる(注19)。天皇詠が家持の手許に残らないのは当然のこととなる。

六、おわりに

行宮での宴席は右の次第であろう。行く先々において、天皇

一行を歓迎する宴席が張られ、当然のことながら内舎人家持もそうしたおこぼれに与かった。旅先の行宮ごとの詠歌が家持というレベルにおいて希有にも記録されることとなったのであった。ただ旅先の行宮ごとの詠歌とは言っても、全ての行宮での歌が記録されているわけではない。『萬葉集』での記録と『続日本紀』における記録を対比すると次のようになる。

河口行宮・朝明行宮・狭殘行宮・多藝行宮・不破行宮

……………『萬葉集』卷第六

堀越頓宿・名張郡・安保頓宮宿・河口頓宮・老志郡宿・

赤坂頓宮・朝明郡・石占頓宿・当伎郡・不破頓宿（下略）

……………『続日本紀』

藤原廣嗣逮捕処刑の報が入る河口の地より前は一泊のみであり、宴を開く余裕もないであろうから無視するとして、二泊の「老志郡宿」、九泊の「赤坂頓宮」での歌があつてもよい。しかしそれは記録されてはいない。歌を記録するという面において恣意的であつたと言つてよい。家持にとつて満足の行く詠作が出来なかつたのかも知れない。

【注】

1 『続日本紀』には聖武天皇勅として「暫住關東」とあり（『続日本紀』天平十二年十月二十六日条、これによつて「關東行幸」とした。この場合、「関」とは河口関及び三関をさし、「東」とは広義の東（「第三の東」）の地をさしている。「第三の東」については、大野晋氏『日本語の

起源』岩波新書、五八頁（岩波書店、一九五七年九月）、大久保正氏「万葉集における東歌の範圍とその意味するもの」（北海道大学『国語国文研究』三八号・四〇号、一九六七—一九六八年、同氏『萬葉集東歌論攷』塙書房、所収）、廣岡義隆「草蔭の安努」考」（三重大学『人文論叢』四号、一九八七年三月）、廣岡義隆「近江は畿外？」（はなわ新書『萬葉のこみち』塙書房、二〇〇五年一〇月、所収）、参照。

2 『萬葉集』中の「幸」の全五八例は以下の通りである（「行幸」を意味する「幸」の事例に限り、「行幸」「幸行」などの複合例を除いた）。

- 1・五題詞、六左注（計三例）、七左注（計三例）、八左注、九題詞、二七題詞、二七左注、三四題詞、三四左注、三六題詞、1・三九左注（計六例）、四〇題詞、四四左注、五〇左注（計二例）、五四題詞、五七題詞、六四題詞、六六題詞、七〇題詞、七一題詞、七四題詞。2・一一題詞、一四六題詞、一九一、一九六。3・二八七題詞、三〇六題詞、三二五題詞。4・五一一題詞、五四三題詞、五四六題詞。6・九〇七題詞、九一六左注、九一七題詞、九二〇題詞、九二八題詞、九三五題詞、九五〇題詞、九九七題詞、一〇〇五題詞、一〇二九題詞。9・六六五題詞、一六六七題詞、一七二三題詞。19・四二三四左注、四二六八題詞。20・四四三九題詞、四四五七題詞。

3 廣岡義隆「額田王の「宇治の都の借廬」詠について」（三重大学『人文論叢』二〇号、二〇〇三年三月）。

4 『伊豫國風土記』逸文「伊社迹波之岡」条（湯郡条）の本文は、廣岡義隆「伊社迹波之岡」（上代文献を読む会編『風土記逸文注釈』翰林書房、二〇〇一年二月）を参照されたい。

- 5 仁藤教史氏は『日本書紀』(孝徳天皇条)の事例をもとに「大まかな区別は可能だが、厳密な意味での「行宮」、「離宮」の峻別はされていなかったことになる」と指摘する。仁藤教史氏「古代の行幸と離宮」(『条里制・古代都市研究』一九号、二〇〇三年二月、一三頁)。

- 6 この温湯宮については、新編日本古典文学全集『風土記』の頭注(五〇六ページ注四)において、

松山市南久米町北来住の来住^{ルミ}・廃寺(松山市文化財調査報告書12)がある来住台地に官衙^{かんが}群が形成され、そこに温湯宮(石湯行宮)があった可能性が指摘されている(松原弘宣「熱田津と古代伊予国」)。この地は『和名抄』では隣の久米の郡と考えられるが、古代はこの辺りまでが温泉の郡であったか(一五〇四ページ注六、五一二ページ注一)。

と記したところであった。その松山市文化財調査報告書12は『来住廃寺』(松山市教育委員会等、一九七九年三月)であり、松原弘宣氏の『熱田津と古代伊予国』は創風社出版、一九九二年四月刊である。関連して松原弘宣氏には「伊予国久米評の成立と回廊状遺構」(『日本歴史』五〇四号、一九九〇年五月)、「回廊状遺構と熱田津」(新版『古代の日本』④『中国・四国』角川書店、一九九二年一月)等がある。その後、重松佳久氏「久米官衙遺跡群の概要」(『日本歴史』六五八号、二〇〇三年三月)があり、右の松原弘宣氏の指摘を承認している。この松原弘宣氏や重松佳久氏は来住廃寺の西に位置する「回廊状遺構」をそれと考えている。最近出た『史跡久米官衙遺跡群 調査報告書』(松山市教育委員会等、二〇〇六年三月)では、久米官衙遺跡群全体を行宮を含む官衙と見

る考え(松原弘宣説)と天皇家の直轄領(ミヤケ)の一角に置かれた役所とする考えとを併記(二八頁)しつつも、石湯行宮の存在を重視している(一四頁)。

- 7 廣岡義隆「狭行宮における大伴家持詠について」(『三重大学日本語学』一六号、二〇〇五年六月)。

- 8 仁藤教史氏、注5に同じ。

- 9 瀧浪貞子氏「大仏造立への道程——聖武天皇の「彷徨五年」(京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』三号、一九九〇年三月。同氏『日本古代官廷社会の研究』所収)。所収本による。

- 10 廣岡義隆「河口」(『東海の万葉歌』おうふう、二〇〇〇年七月)、参照。

- 11 このことは、例えば桑原滋郎氏「多賀城と東北の城柵」(『古代日本を発掘する4『大宰府と多賀城』所収、岩波書店、一九八五年三月)に具示されており、不破関の発掘においても確認できるところである。

- 12 廣岡義隆「天平の風流——遣新羅使人歌における宴——」(『三重大学日本語学』一六号、二〇〇五年六月)。

- 13 影山尚之氏「聖武天皇「東国行幸時歌群」の形成」(『解釈』三八巻八号、一九九二年八月)。

- 14 一〇三〇番歌・一〇三一番歌左注が後補であるということは、徳田浄氏『萬葉集成成立攷』一九六七年二月。「巻六の撰」条、四七頁)や中西進氏「万葉集巻六の形成」(『國語と國文學』四二巻六号、一九六五年六月。同氏『中西進万葉論集』第六巻所収、一六七頁)によって早くから指摘されている。

15 岡田登氏「壬申の乱及び聖武天皇伊勢巡幸と北伊勢(上)(下)」

朝明郡家跡の発見を契機として」(皇學館大学『史料』一九一〜一九二号、二〇〇四年六〜八月)。

16 廣岡義隆、注7に同じ。

17 山中章氏「聖武天皇の「朝明行宮」か」(『京都新聞』二〇〇四年六月一〇日)。

18 仁藤敦史氏、注5に同じ。一九頁。

19 小野寛氏は河口という場における言及であるが、「内舍人たちは内舍人たちで小宴を持っただろう」と指摘している(小野寛氏「聖武天皇閑東行幸の時の歌八首」『駒澤國文』三八号、二〇〇一年二月)。

参考文献

・小野寛氏「久遠京の歌」(学習院女子短期大学『国語国文論集』六号、一九七七年二月、同氏『大伴家持研究』所収)。

・真下厚氏「天平十二年聖武東國巡幸歌群歌考——(妻恋ひ)の歌のはたらきをめぐって——」(『城南國文』一〇号、一九九〇年一月)。

・廣川晶輝氏「聖武天皇東國行幸從駕歌論」(『国文学言語と文芸』一一五号、一九九八年十一月、同氏『万葉歌人大伴家持 作品とその方法』所収)。

・廣岡義隆「国府宴席歌考——近江万葉の世界——」(『高岡市万葉歴史館紀要』一〇号、二〇〇〇年三月)。

・田阪仁氏「聖武天皇の伊勢国行幸と閑宮跡について(上)(下)」(『斎宮歴史博物館研究紀要』一〇〜一一号、二〇〇一年三月〜二〇〇二年三月)。

・森朝男氏「伊勢国行幸從駕の歌」(セミナー万葉の歌人と作品、第八巻『大伴家持(一)』和泉書院、二〇〇二年五月)。

・小笠原好彦氏「古代の離宮・行宮・頓宮遺跡の諸問題」(『条里制・古代都市研究』一九号、二〇〇三年二月)。

・新沢典子氏「歌に示された聖武朝史——巻六・一〇二九〜四三の配列をめぐって——」(『名古屋大学国語国文学』九七号、二〇〇五年一月)。

・赤川一博氏「聖武東遊の謎をめぐって 大仏構想からみた伊勢行幸」(『四日市市立博物館研究紀要』一三三号、二〇〇六年三月)。

* 当稿は、二〇〇七年一月二四日に本学内において開催された伊勢湾・熊野地域研究センターの研究会において発表したものをベースにしてまとめなおしたものであり、伊勢湾・熊野地域研究センターにおける共同研究の一環として位置付けられるものである。

発表会当日、榎村寛之氏(斎宮歴史博物館学芸員)、尾西康充氏、塚本明氏、山中章氏から種々の教示を得たが、生かしていないところもある。ここに記して感謝申し上げます。

付記 当稿を纏めた後に、『三重大史学』七号(二〇〇七年三月)が刊行された。この中には、柴原永遠男氏「伊勢湾交通からみた北伊勢の地域的特徴」の有意義な論考、及び天野三恵子氏・山中章氏「文献史料に見る行幸史料集(抄)」がある。併せて参照されたい。

「ひろおか よしたか 本学教員」